

## はじめに

行動分析学は、20世紀に B・F・スキナー\*1 が始めた新しい心理学です。スキナーはアメリカではよく知られており、じっさい、「Eminent psychologists of the 20th century」\*2 のランキングで栄えある第一位に挙げられているほどです。控えめに評価しても、20世紀の心理学界に非常に大きな影響を与えた心理学者の一人であることは間違いありません。もともと日本ではあまり知られておらず、しかも、しばしば誤解されたり、時には曲解されたりしています。それらの誤解・曲解を解消することも、この長谷川版の目的の一つとなっています。

行動分析学とは何か、どういう特徴があり、何をめざす学問なのかについては、この長谷川版に書かれている内容をお読みになってくださいとしか言えませんが、とりあえず、概観していただくため、日本行動分析学会の公式サイト\*3 の案内文を引用させていただきます。

日本行動分析学会とは：人は、なぜそのように行動するのか、あるいはまた、なぜ行動しないのか。日本行動分析学会は、B.F.スキナーに始まる実験的行動分析、応用行動分析、理論行動分析の研究を推進しさらにそれを職業的・社会的実践に適用しようとする人たちの集まりです。【以下略】

カバーする領域：行動分析学で扱われるテーマは非常に幅広く、行動諸科学や倫理的問題に関する基礎研究のほか、医療、教育、産業、福祉、障害を有する個人への諸サ

---

\*1 Burrhus Frederic Skinner, 1904年3月20日 - 1990年8月18日。

\*2 <http://www.apa.org/monitor/julaug02/eminent.aspx> による。元の出典は、Haggbloom et al. (2002). The 100 Most Eminent Psychologists of the 20th Century. *Review of General Psychology* 6, 139-152

ちなみにランキング 30 位までは以下の通り。 1. B.F. Skinner / 2. Jean Piaget / 3. Sigmund Freud / 4. Albert Bandura / 5. Leon Festinger / 6. Carl R. Rogers / 7. Stanley Schachter / 8. Neal E. Miller / 9. Edward Thorndike / 10. A.H. Maslow / 11. Gordon W. Allport / 12. Erik H. Erikson / 13. Hans J. Eysenck / 14. William James / 15. David C. McClelland / 16. Raymond B. Cattell / 17. John B. Watson / 18. Kurt Lewin / 19. Donald O. Hebb / 20. George A. Miller / 21. Clark L. Hull / 22. Jerome Kagan / 23. Carl G. Jung / 24. Ivan P. Pavlov / 25. Walter Mischel / 26. Harry F. Harlow / 27. J.P. Guilford / 28. Jerome S. Bruner / 29. Ernest R. Hilgard / 30. Lawrence Kohlberg

\*3 <http://www.j-aba.jp/aboutus/index.html>

ービス、さらには行政などにもその対象領域が広がっています。

もう1つ、日本行動分析学会の理事長、編集委員長、大会長などを歴任された小野浩一先生による定義\*4を引用させていただくことにします。

行動分析学は、人間を中心とした生物全般の諸活動を主として環境と個体との相互作用という側面から探求し、行動に関する因果法則を明らかにしていこうとする学問です。

従来の行動分析学入門書では、

- ・基礎的な実験的行動分析学に重点が置かれていたもの
- ・日常生活に困難を抱えている方々への支援、スキル向上、セルフマネジメント、組織改善など、臨床や応用に重点が置かれていたもの

などが多かったように見受けられます。これに対してこの長谷川版には、

- ・基本概念をめぐる議論をできるだけ多面的に掘り下げる
  - ・生きがい、QOL向上、その他、種々の社会的問題にも言及する
- といった特徴があります。具体的には、

- 行動を予測したり、その行動に影響を与えたりする。これにより、
  - ・望ましい行動を増やす（適切な場所で起こるようにする）
  - ・問題行動を減らす（不適切な場所で起こらないようにする）といった改善を可能にする。
- 行動の生起頻度といったの量的な変化ばかりでなく、スキルアップのような質的向上も可能にする。
- 「したいからする」行動と「しなければならないからする」行動の仕組みを明らかにする。
- 価値の創出や生きがいの仕組みを明らかにする。
- 行動随伴性に基づいてライフスタイルの多様性を理解したうえで、自身の生活設計に役立てる。
- 行動分析学の発展型の1つ「関係フレーム理論」に基づいて、さまざまな苦悩の原因と有効な対処策を明らかにする。

といった点を目ざしています。

この電子版の目的は、教養教育科目「行動分析学入門」の教科書を提供することにあります。

---

\*4 駒澤大学・小野浩一研究室のWebサイトより引用。

<https://www.komazawa-u.ac.jp/~ono/basummary.html>

ますが、受講生以外の方々でもご自由に閲覧していただけるよう、パスワードなどは一切設定しておりません。ちなみに私はペーパーレス主義者であり、他の授業を含めて、原則として印刷教材は使わないようにしております。各章の PDF ファイルをダウンロードし、ノートパソコンやタブレット端末などで閲覧していただくことを原則としています（もちろん、利用される方のご都合によってはご自身で印刷していただくことも可能です。但し、元の PDF ファイルと閲覧ソフト、プリンターとの不整合によりフォントの一部が別の字体に“変身”してしまうことがあるかもしれません）。